

はイスラームに内在するものではなく、「インドネシアのムスリマたちは歴史的な偏見を修正し、新たな解釈を生み出そうとしている」(p.100)と本書を結んでいる。

以上に明らかなように、本書はブックレットという制限の中に、イスラームの思想、フィールドワークから得たデータ、統計等のデータをバランスよく盛り込み、「ムスリマを育てる」というテーマについてインドネシアの具体的事例から鮮やかにイメージできるように配慮されている。だが、ここで示されたのは、著者の長期にわたる丹念な調査に基づく考察のごく一部である。特に第2章で論じられた近代初期のイスラーム改革思想とディニア・プトリの事例は、著者によるこの学校での長期の住み込み調査に基づいて書かれた著書『インドネシアの近代女子教育——イスラーム改革運動の中の女性』に詳細に記載されている。本書で興味を刺激されたならば、ぜひ合わせて読んでいただきたい。

隣国マレーシアのイスラーム教育を研究対象とする評者の視点から気になった点をあえて一つ挙げるならば、第3章と第4章で比較的多くのページが割かれている「古典的宗教書を現代のコンテクストにおいて再解釈しジェンダー・バイアスを更正する」という取り組みの位置づけについてである。このような取り組みの代表的人物としてマスダル・マスウディを挙げ、代々ウラマーの家に育ち、イスラーム寄宿塾出身の彼がNGO「イスラーム寄宿塾社会開発協会 (P3M)」を設立し、ジェンダー・バイアスへの意識をイスラーム寄宿塾の関係者に浸透させる試みを行っていることが紹介されている (p.78-80)。

このような記述からは、古典的宗教書の再解釈という取り組みが、伝統重視の立場と矛盾しないような形で生み出されてきたかのように見えるが、はたして「多くの、普通のムスリム」にとって受け入れられるようなものであったのか。例えば、しばしばこうしたムスリム社会におけるジェンダー言説の重要なコンテクストとなる諸外国からの圧力や資金の流入について、Bruinessen は P3M が 1990 年代からフォード財団の支援を受けて「女性に優しいイスラーム法学」等の大型プロジェクトを実施していたことを指摘している [Bruinessen 2011: 29]。こうした欧米の資金に支えられた取り組みを多くのムスリムはどのようにとらえていたのだろうか。

最後に、本書は冒頭に述べたように、「ムスリマからみた教育」について知ることができる貴重な日本語文献であるが、英語では近年少しずつこのような視点での研究が出版されてきている。例えばインドネシアについては、イスラーム寄宿塾の主宰者の妻たちからみた教育を論じた [Srimulyani 2012]、マレーシアについては都市の成人女性にとってのイスラームを学ぶことの意味を論じた [Frisk 2009] 等が、ムスリマにとってのイスラームを学ぶ意味に深く切り込み、様々な角度から論じている。ムスリマとしての教育と生き方は、イスラームへの確信を軸としながらも社会の変化を柔軟に受け入れながら変化し続けている。本書のように、こうしたムスリマの視点からみたイスラームと教育の問題を社会的コンテクストの中で読み解く研究は、国際的にも今後増えていくことが期待される。

<参考文献>

- 服部美奈 2001 『インドネシアの近代女子教育——イスラーム改革運動の中の女性』 勁草書房。
- Bruinessen, Martin van. 2011. *What happened to the Smiling Face of Indonesian Islam? Muslim Intellectualism and the Conservative Turn in Post-Suharto Indonesia (RSIS Working Paper no.222)*. Singapore: S. Rajaratnam School of International Studies Singapore.
- Frisk, Sylva. 2009. *Submitting to God: Women and Islam in Urban Malaysia*. Copenhagen: NIAS Press.
- Srimulyani, Eka. 2012. *Women from Traditional Islamic Educational Institutions in Indonesia: Negotiating Public Space*. Amsterdam: Amsterdam University Press.

(久志本 裕子 マレーシア国際イスラーム大学言語マネージメント学部講師)

伊東未来『千年の古都ジェンネ——多民族が暮らす西アフリカの街』昭和堂 2016年 x+248+6頁

本書はジェンネ(マリ)についての詳細な民族誌であり、本書を読めば、ジェンネの街の全てが分かる、

といっても過言ではない。また本書は、著者である伊東未来氏の博士論文(2013年に大阪大学大学院人間科学研究科に提出)が元になった学術書であるが、著者とジェンネの人々との興味深いエピソードが数多く織り込まれており、西アフリカの専門家ではなくとも、最後まで楽しんで読むことができる。本書の章構成は、以下の通りである。

序論 ジェンネ概観

第1章 ジェンネの歴史

第2章 ジェンネの多民族性

第3章 ジェンネのイスラーム

第4章 ジェンネの市場

第5章 ジェンネの街区

第6章 変わらぬジェンネと変わるジェンネ

序論では、3つの問いが提示されている。その内容は、①ジェンネはいかにして長期間にわたって都市であり続けているのか、②ジェンネの多民族性はどのように保持・再生産されているのか、③ジェンネはどのように都市としての凝集性を保ってきたのか、である。この3つの問いが、本書を通じて主に著者の計2年間の現地調査をもとに明らかにされる。

第1章「ジェンネの歴史」では、紀元前3世紀頃からマリが独立する1960年までの歴史が、歴史文献や口頭伝承を元に記述されている。ジェンネはサハラ交易を通して繁栄し、ソンガイ王国による支配(1468年～)やモロッコによる支配(1591年～)を受けながらも、独自の自治を維持していた。しかし19世紀、ヨーロッパ人探検家らが訪れ、フランスの植民地支配が始まると、サハラ交易の中継都市としての機能を失い、衰退した。人々はジェンネが繁栄した時代について饒舌に語る一方で、衰退していった時期については口が重くなるというエピソードは、彼らの歴史観と、人々にとって繁栄した時代のジェンネがいかに誇りであり、彼らのアイデンティティーの拠り所となっているかを示している。

第2章「ジェンネの多民族性」では、ジェンネの人口の約8割を占めるソルコ、ソンガイ、フルベ、マルカなどの民族について述べられている。ジェンネの人々の民族と生業は、ほぼ一致している。それは、マリ王国の時代(13～14世紀)、社会階層が自由民、職能民、奴隷の3つに分けられていたことに起因する。この区分は、マリの独立後に廃止されたが、現在も人々の生活の中に根付いている。例えば、ジェンネの最初の居住者とされているソルコは、水域の所有権を持ち、漁撈を主な生業としている。民族ごとに生業が異なるため、各民族は必然的に、互いの生産物を売買・交換し、深い関わり合いをもって日常生活を送っているのである。

第3章「ジェンネのイスラーム」では、ジェンネのほとんどの人々が信仰しているイスラームについて詳述されている。イスラームはクルアーン学校での宗教教育だけでなく、人々の日常生活や人生儀礼にも深く関わっている。その中で重要な役割を果たすのが、「アルファ」と呼ばれるイスラームの「先生」である。アルファは、クルアーン学校の教師という役割のほか、人々から相談を受け、護符を作成したり薬を調合したりする。子どもの命名式や割礼、結婚式、葬儀などの人生儀礼では、その場を取り仕切り、祈祷を行う役割を担う。また、街の象徴的な存在であるモスクの年に一度の泥の塗り直し作業は、民族や世代の違いを越えて実施される行事であり、ジェンネの街全体の連帯が深められる機会となっている。このように、イスラームは全ての人に開かれており、民族の違いは不問とされるのである。

第4章「ジェンネの市場」では、ジェンネの常設市と定期市について述べられている。常設市の売り手・買い手は、ともにジェンネの女性であり、日常的に使用する食材が小分けにして販売されている。それに対して毎週月曜日に開催される定期市には、街の外からも多くの人々が訪れ、賑やかになる。街の内と外に解放された定期市では、誰もが売り手となることができる。売り手が数千人にのぼる定期市は、街ができたときから存在する、と言われており、交易都市として繁栄していた当時のジェンネに多くの人々が行き交い、内外に開かれていた様子を想起させる。

第5章「ジェンネの街区」では、街区が超民族的な自治単位となっていることが示されている。街区は、

共有財産の管理、割礼や結婚式の運営、祭事の実行単位として機能する。各街区には行政担当と祭事担当の長がそれぞれ存在し、これらの長を中心として、街区の会合が開かれる。この会合では街区全体の結束や利益が一番に優先されており、民族や生業の違いを超えて円滑な日常生活を送る基盤となっている。

第6章「変わらぬジェンネと変わるジェンネ」では、変わる側面として第1に、ジェンネが観光地化したことがあげられている。1988年にジェンネの街とその周辺の遺跡群がユネスコの世界文化遺産に登録されると、観光客が急増し、ホテルの建設も相次いだ。ホテル業従事者の多くがジェンネ出身者でないことに人々は不満をもっているが、観光地化したジェンネでは今後、民族と生業の結びつきが変化したり、自文化が再考されたり創出されたりすることも考えられる。第2に1990年代、マリが世界銀行の構造調整計画に合意し、地方分権化とともに政府が推進した地方自治体と市民をつなぐ中間集団としての「アソシアシオン(住民アソシエーション)」が急増したことが指摘されている。アソシアシオンは既婚女性で構成され、互助講のような役割を果たしている。活動目的を共有する人々によって構成され、民族や年齢、性別、居住街区は不問とされる。これまでジェンネに存在しなかった事業も実施されるなど、ジェンネの経済活動に新たな変化をもたらしている。

変わらぬ側面としては、目に見えない存在である「妖術師(チャルコ)」や「ジン(精霊)」の事例が紹介されている。チャルコは様々な姿に化けて人を攻撃するとされており、人々はその特徴を、ときに体験談を交えながら詳細に語るができる。また、ジンは電気の普及によって夜も明るくなり、その数が減少したと言われているものの、人々に悪さをしたり、アルファとともに仕事をしたりする。チャルコやジンは人々が不幸に見舞われたときの原因とされることも多く、今後も変わらぬものとしてジェンネに存在し続けるであろう。

そして最後に、序論の3つの問いに対する答えが述べられている。①ジェンネはいかにして長期間にわたって都市であり続けているのか、については、ジェンネが交易都市として発展し、衰退した後も食糧生産が可能な自然環境にあったことが指摘されている。また、ジェンネが「都市」として多様な側面を持つことも理由としてあげられている。人々は街の規模(人口約1万4千人、面積1平方キロ未満)などから、現在のジェンネを田舎であると認識している。しかし一方で、人々は多民族で構成されていることが都市の条件であるとも考えており、十以上の民族を有するジェンネを「都市」であると表現する場合もあるという。著者も鉤括弧つきで「都市」と記述しているように、ここでは、「ジェンネの人々にとっては」という条件付きの都市を意味している。そのため、本問いの答えは、現在のジェンネについては一般的な都市の定義には当てはまらないことに注意する必要があるが、むしろここでは、ジェンネの人々にとっての都市性が多民族性と結びついているという指摘に重要な意味がある。

②ジェンネの多民族性はどのように保持・再生産されているのか、については、ジェンネでは民族と生業が一致しており、日常生活の中で相互に生産物や製作物を交換したり、労働力を融通したりすることで、民族間の境界を維持してきたことが指摘されている。生業と結びついた民族の差異は明確であるが、このような日常的な関係や、イスラームという民族を超えた共通性が、民族間の不和を回避し、1つの街としての結びつきを可能にしている。

③ジェンネはどのように都市としての凝集性を保ってきたのか、については、街区を中心とした政治組織が、民族や生業ごとの利害を超えて機能してきたことがあげられている。祭事の実働単位は街区であり、街区ごとに競い合うことによって、外部から見た統一性が保たれてきたという。この指摘についてはジェンネに限らず、むしろ街が有する典型的な自治機能のようにも思える。ただ、ジェンネが有している独自の求心性としては、著者も述べているように、歴史的にイスラーム教育の中心地であったことや定期市の開催などによって、ジェンネの外の人々を引きつけてきたことは事実である。

以上のように、本書は民族的な多様性を有するジェンネが、どのように一つの街として機能してきたか、について、詳細な調査をもとに明らかにされている。本書の内容が今後、他の地域の事例と比較検討されれば、さらにジェンネの特徴や固有性、他地域との共通点が明らかにされるであろう。

(藤井 千晶 日本学術振興会特別研究員)